

地域の小さな公園を守る 公園ボランティアの今



一般社団法人みんなの公園愛護会

梶田里佳

みんなの
公園愛護
会





みんなの公園愛護会とは

地域の小さな公園が豊かな居場所であるために、公園ボランティアをサポート・応援する団体として2020年スタート。



設立理念：

いつでも、だれでも、ウェルカムな場所、公園。
自然や季節を感じながら、それぞれが自分の時間を過ごせる、心地よい居場所。
行けば誰かに会えたり、偶然の出会いもある。

人がつながり、楽しみが生まれる、みんなの広場。
どれだけ社会が変化しても、人々が公園を愛することは変わらない。

公園やパブリックスペースを良くすることから、街や暮らしを良くしていこう。
だれもが安心して自由に遊び、育ち、学び合える良い遊び場を。
清潔で安全な公共空間を。
人々が憩い、街がにぎわい、交流が生まれるきっかけを。

多様な視点を大切に、作っていこう。
同じ志をもつ仲間と、互いに知恵や力を出し合いながら、未来につないでいこう。



みんなの公園愛護会の取り組み

事業内容



定期的な
アンケート調査



活動ノウハウや
ヒントになる情報の共有



様々な活動や
事例の紹介



行政担当者のための
情報共有の場づくり



公園ボランティアの
コミュニティ形成

公園ボランティアに関するデータ収集と活性化サポートをしています



メンバー紹介

編集者・メディア
コンセプター
(株) 空気読み

跡部徹

創業100年の公園
遊具製品メーカー
(株) パーク

深澤幸郎

友人と近所で
公園愛護会活動中

栢田里佳

国交省から民間の
情報産業分野へ

一言太郎





公園ボランティア実態調査

目的

公園愛護会など公園ボランティアの活動実態を把握すること。

背景

高齢化と担い手不足が共通の課題と言われているが、公園ボランティア制度は、自治体ごとに制度設計・運用されており、支援の内容や活動の実態もバラバラ。市区町村の枠を越えて俯瞰・比較する材料がない。

取組み

(1) 2020年 神奈川県での調査

- ・自治体調査（県内33市町村）
- ・担い手アンケート調査（8自治体1175団体）

(2) 2021年 全国での調査

- ・自治体調査（全国47都道府県1,346市区町村）
- ・担い手アンケート調査（37自治体2292団体）

制度の有無や支援内容、もたらしている価値、活動団体数、活動内容や頻度、やりがい、課題などを調査して分析。



公園ボランティア実態調査2021より

調査の趣旨

各自治体で行われている市民の公園ボランティアに関する実態と現状を多角的に把握し、高齢化および担い手不足が課題とされる公園愛護会活動等をサポートするための参考にする。

全国自治体調査

【調査方法】

期間：2021年6月～8月

対象：全国47都道府県内の1,346
市区町村 公園管理担当課

方法：ネットフォーム+メール

【調査結果】

回答数：761件

回答率：56.2%

担い手団体アンケート

【調査方法】

期間：2021年9月～12月

対象：全国37自治体 2292の団体
+インターネット自由参加

方法：郵送+ネットフォーム

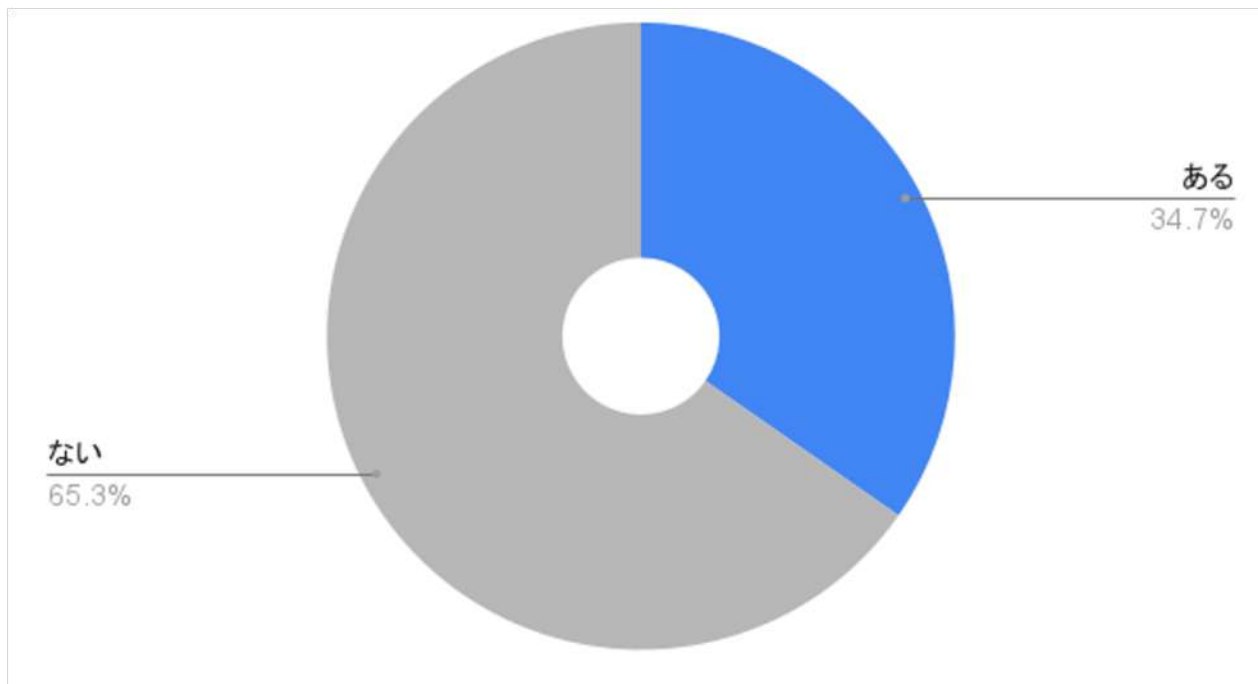
【調査結果】

回答数：1319件

回答率：57.5%



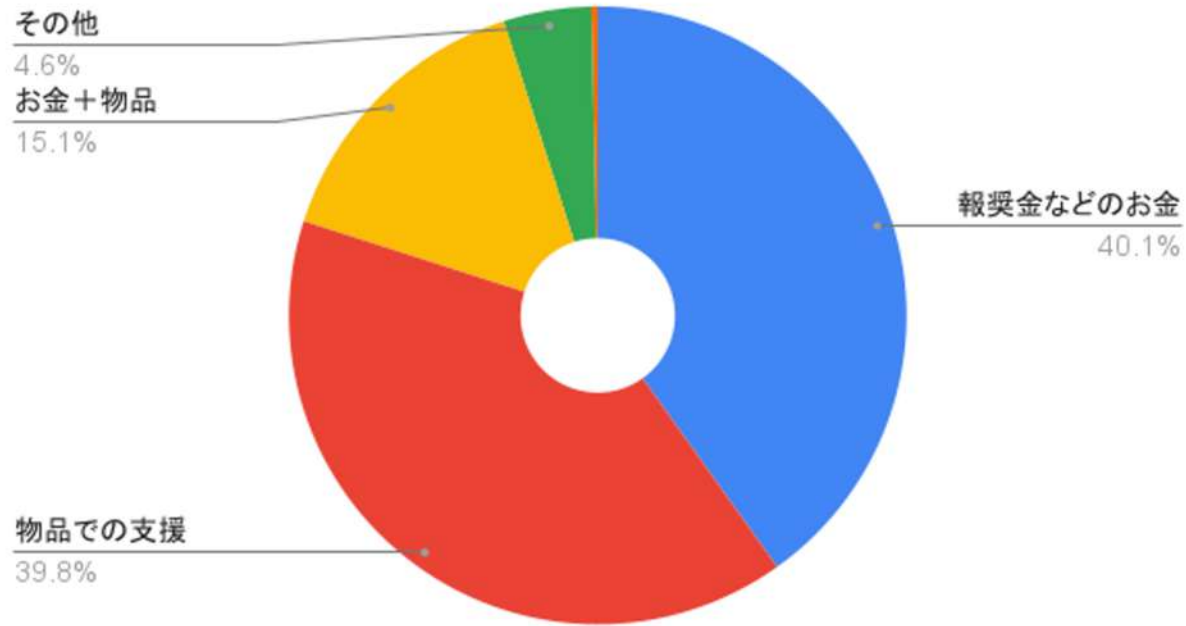
1) 公園ボランティア制度がありますか？



- ・ 公園ボランティアは、北海道から九州まで広く地域に根付いている
- ・ 傾向として人口規模が大きい自治体に公園ボランティア制度があることが多い
人口15万人以上：制度あり（84%）制度なし（16%）
人口15万人以下：制度あり（25%）制度なし（75%）
- ・ 制度がない場合も、地域の人が公園管理に関わる自治体は多い（330自治体）
制度がなくてもボランティア活動は行われている（78自治体）



2) 支援のタイプ



【お金+物品】

共通する基本物品は支給、それ以外に必要なものを各団体が支援金で購入

【物品で支援】

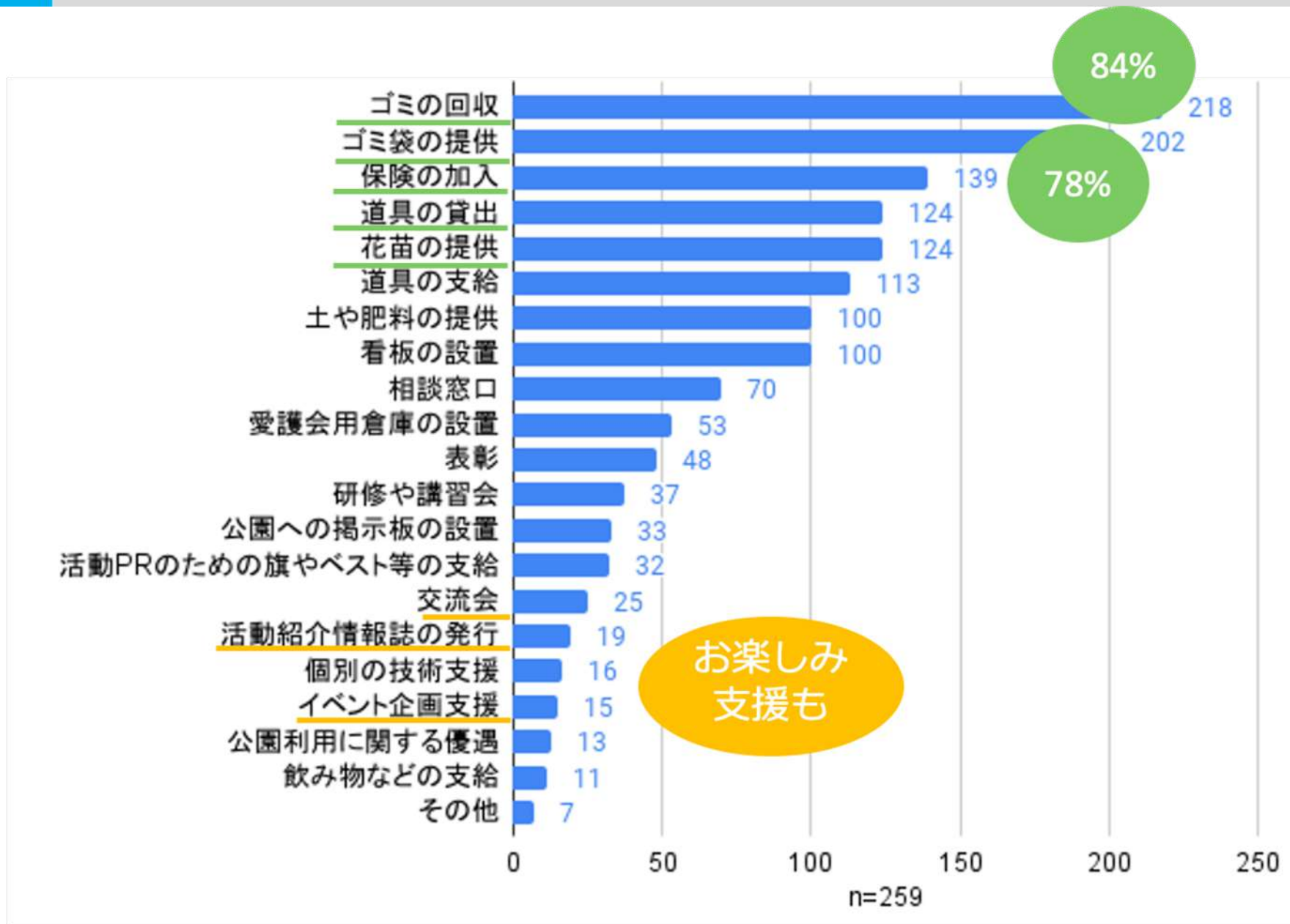
清掃道具や花苗など必要な物品を支給

【お金で支援】

支援金は、大きく分けて、面積に応じて段階的に設定されるケースと、基本料金に面積や活動内容で加算がつくケースがある

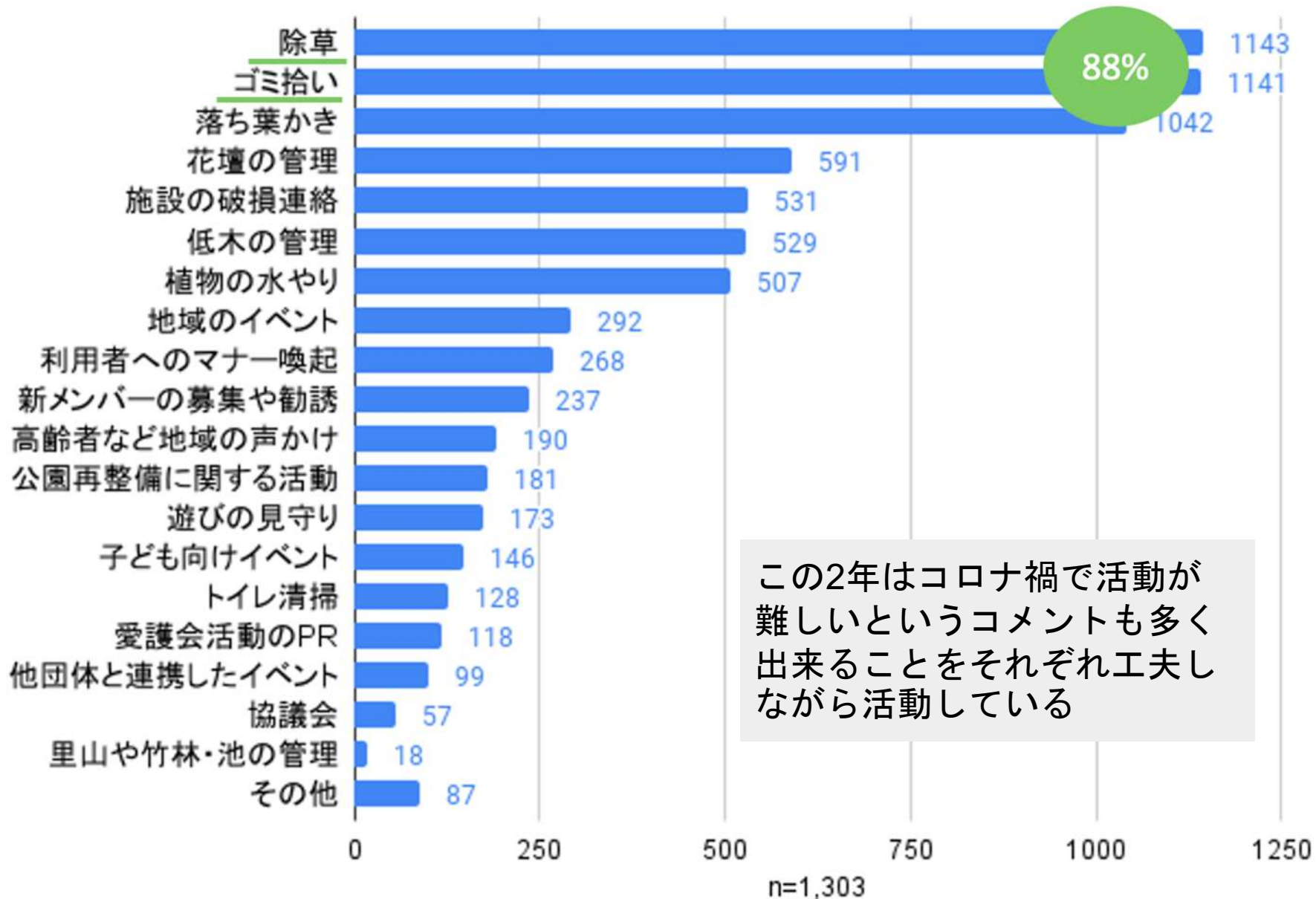


3) 自治体からのサポート内容



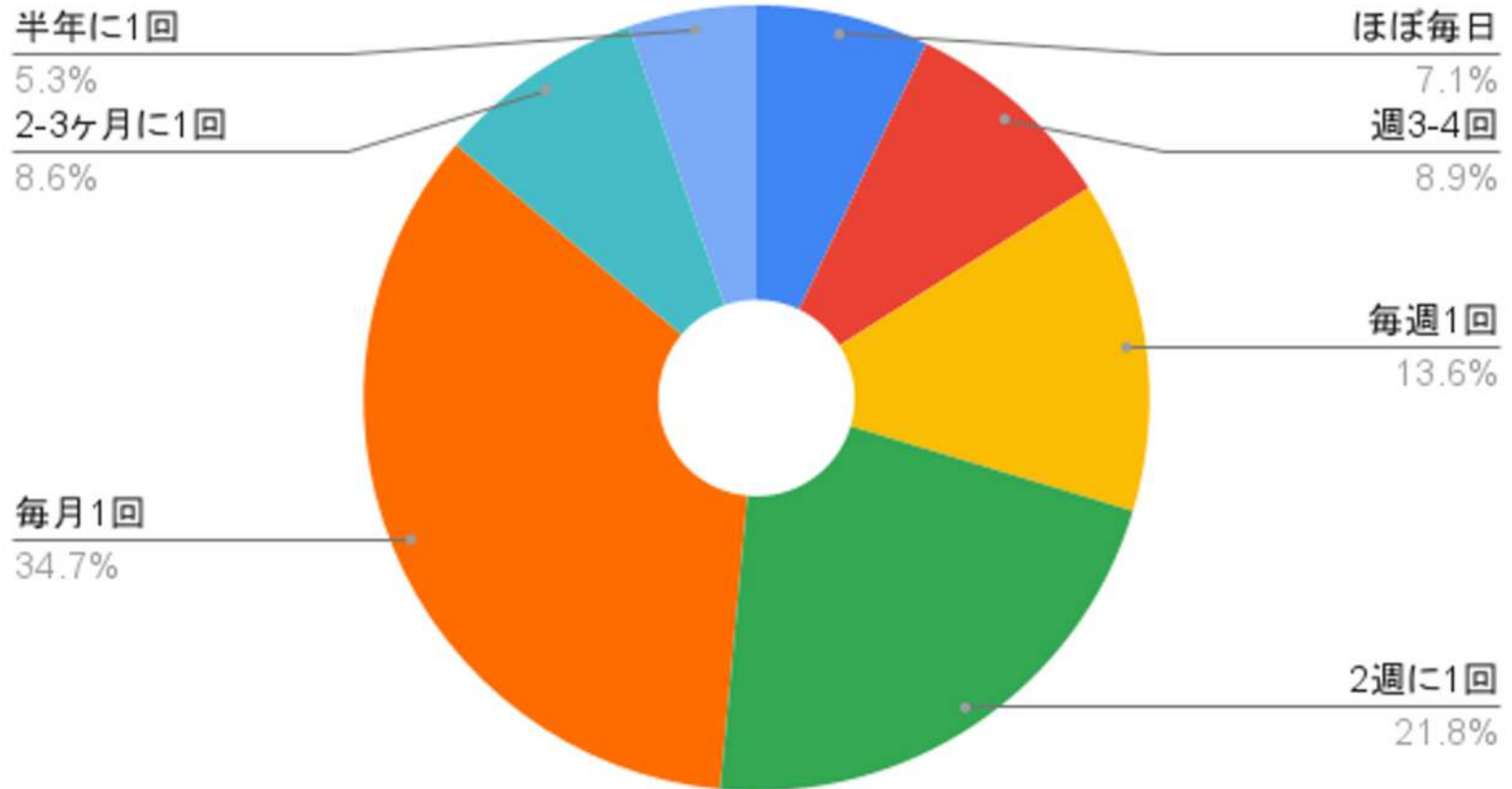


4) 公園ボランティアの活動内容





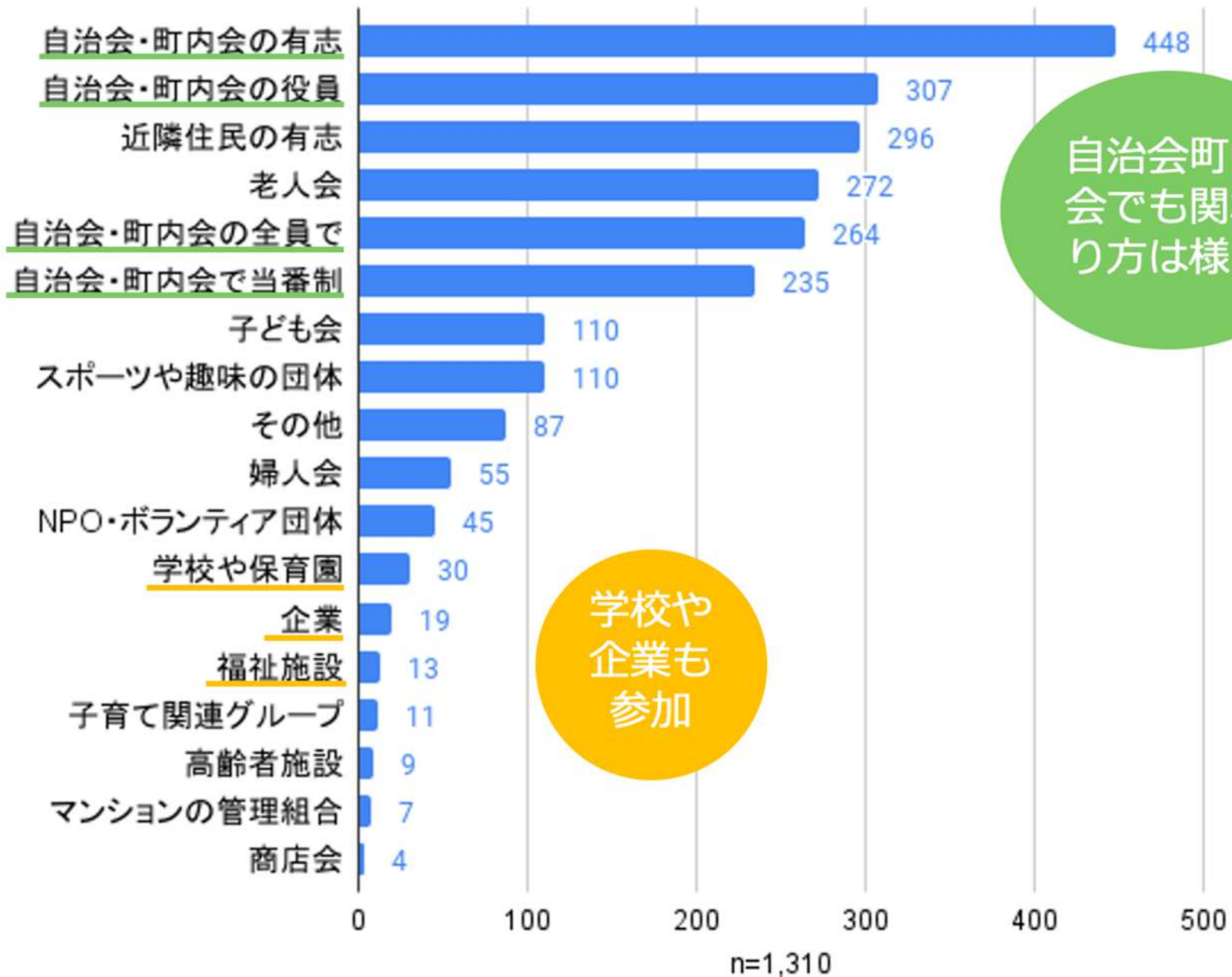
5) 活動の頻度



- ・ 全体の約87.8%の団体が、月1回以上活動している
- ・ 団体としての基本活動以外に、個人的な活動をしている人も、71.1%いる
(自治体への報告書には記載されない活動も多い)

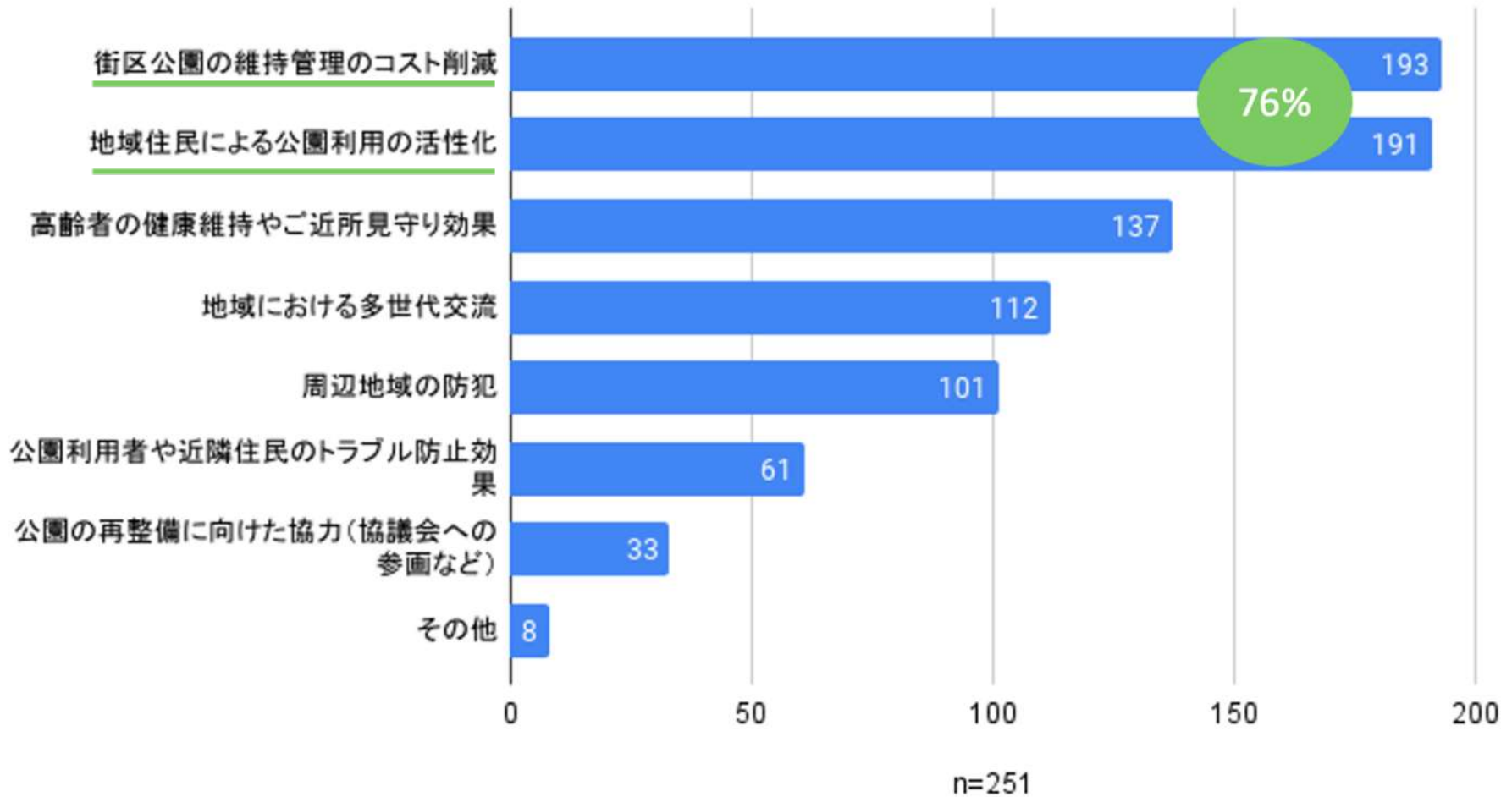


6) 活動の主なメンバー





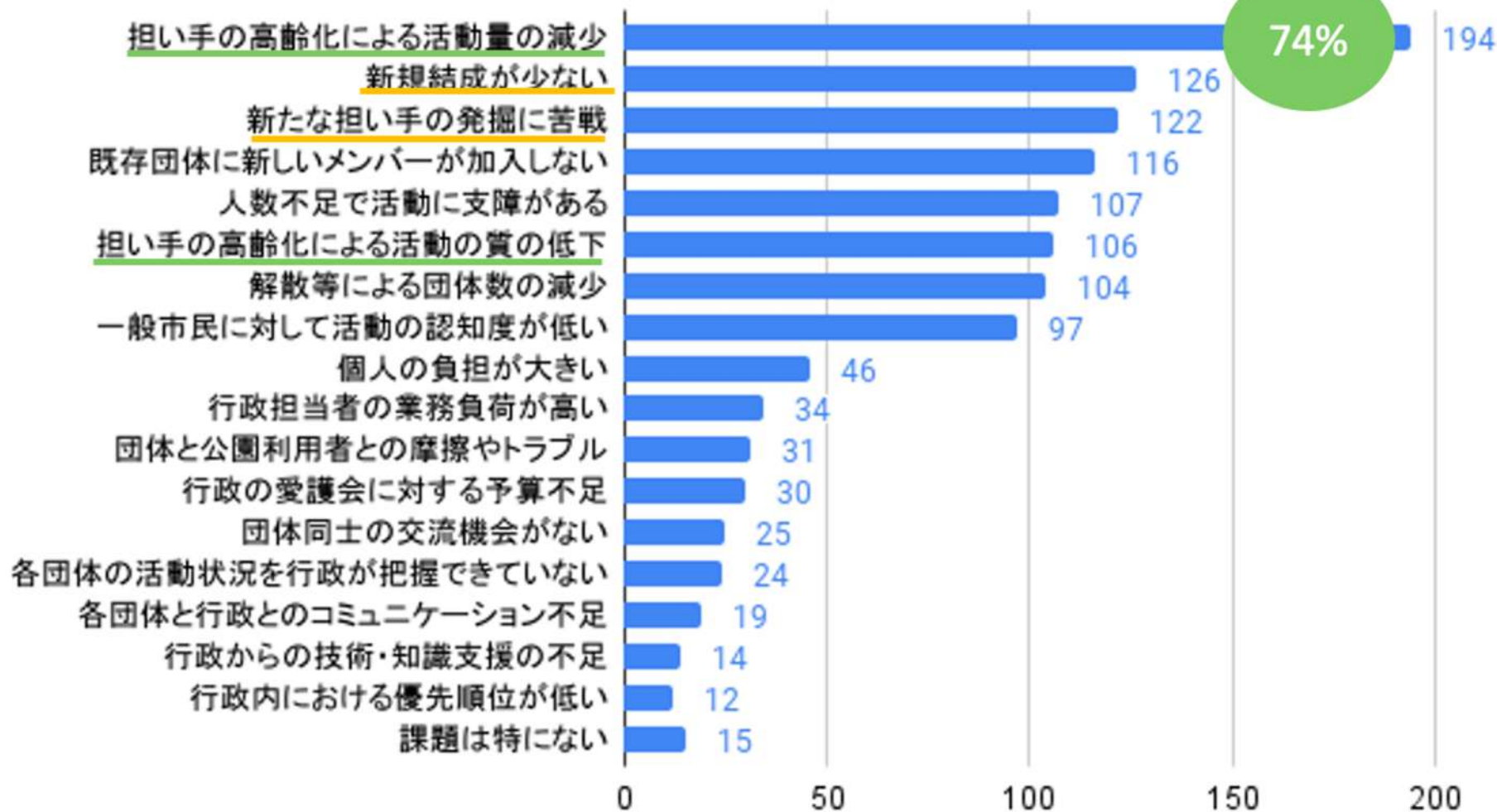
7) 公園ボランティアがもたらす価値や効果



公園清掃や花育ての活動は、人々が定期的に集い交流を深めるきっかけとして機能しているほか、公園が日常的に地域の人々の手で守られていることで、多くの人々が安心して公園を利用することができ、公園を中心とした地域全体の活性化に繋がっているのではないかと考えられる。



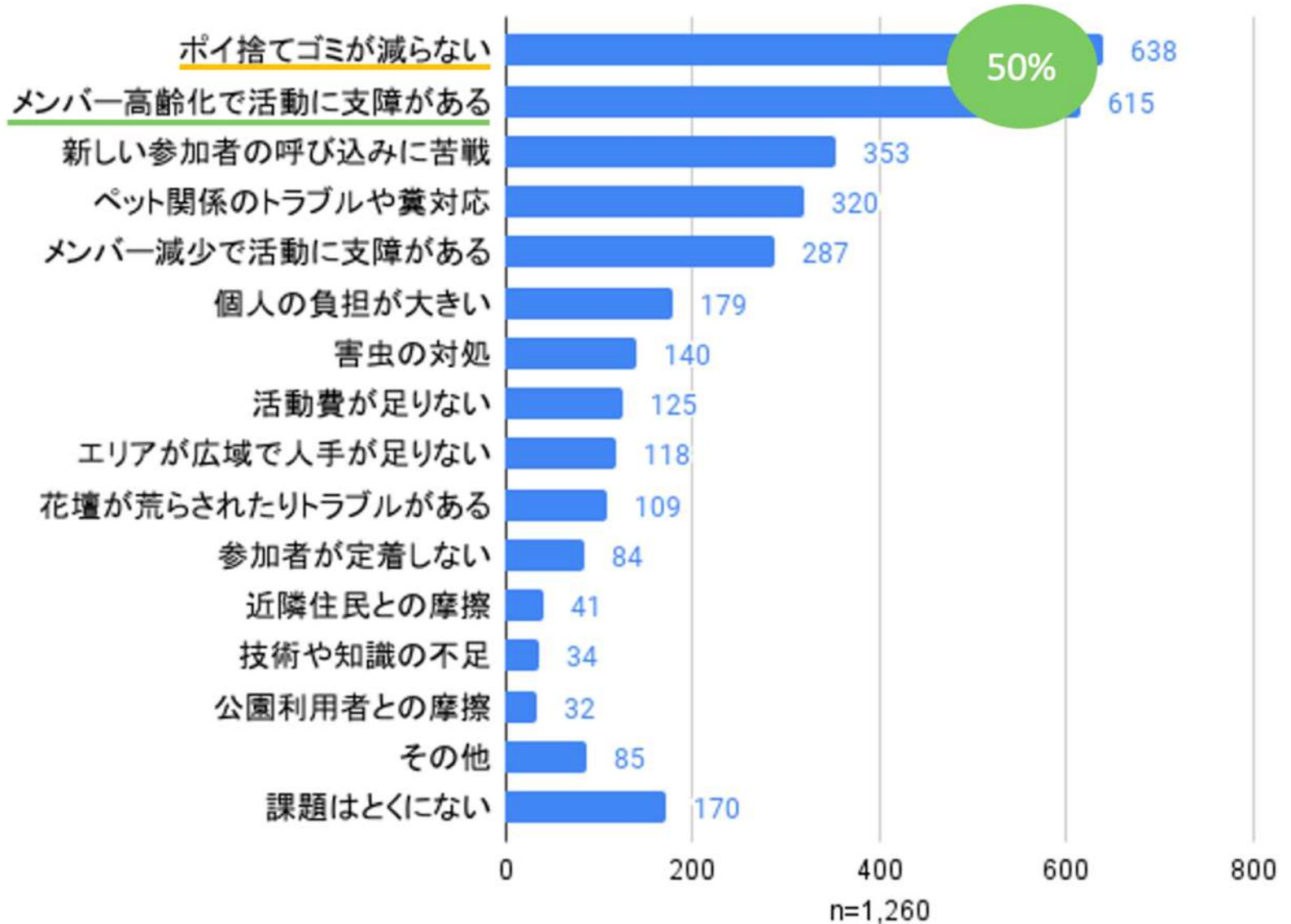
8) 課題（行政の視点で）



- ・ 「担い手の高齢化による活動量の減少」は、地域を問わず最も大きな課題
- ・ 既存の団体の高齢化による活動の先細りと、それに代わる新たな担い手の確保の難しさの両面がある



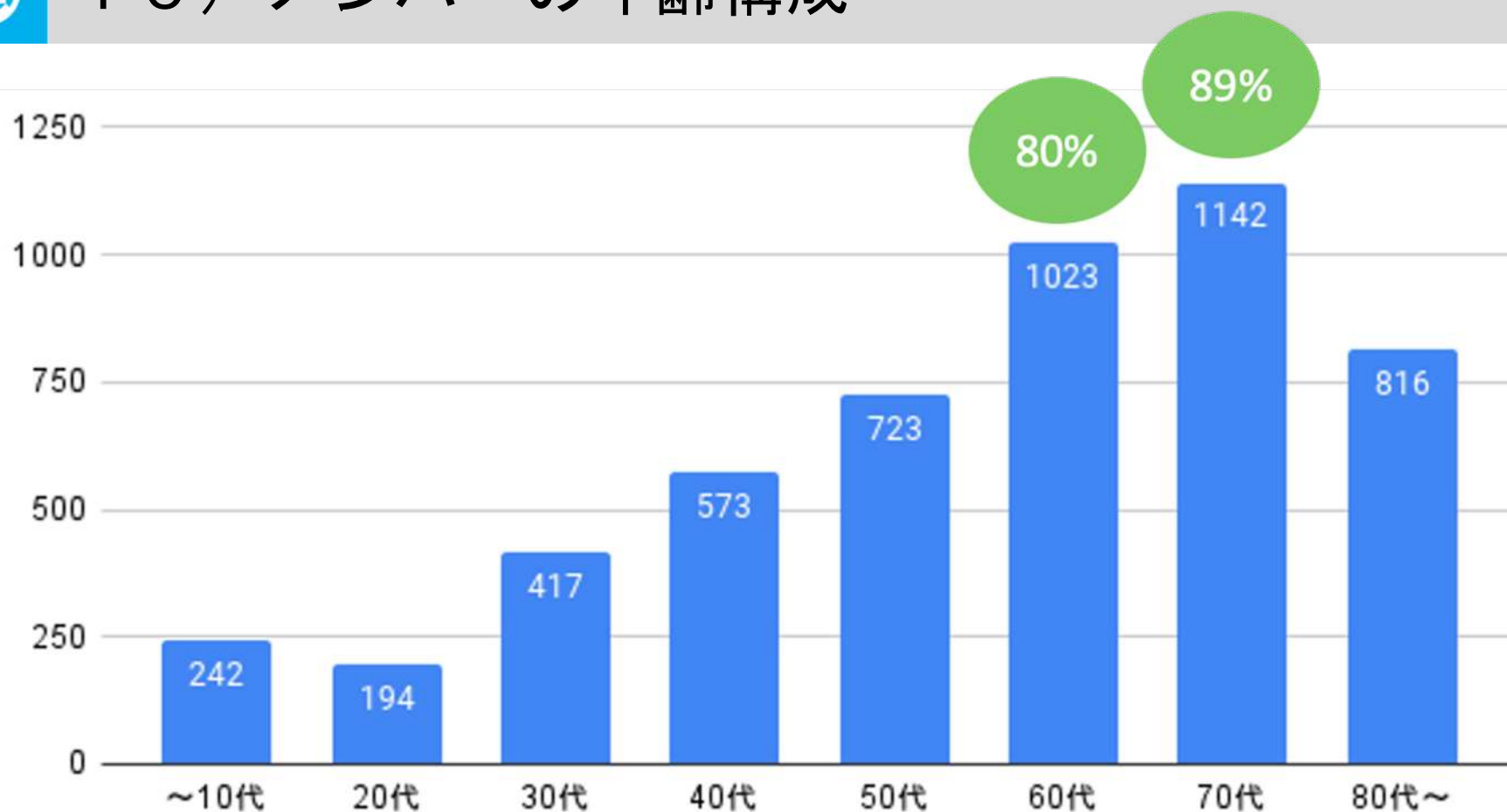
9) 課題 (担い手の視点で)



高齢化と並んで、ポイ捨てゴミが課題。タバコの吸い殻や飲食ゴミが多い。



10) メンバーの年齢構成

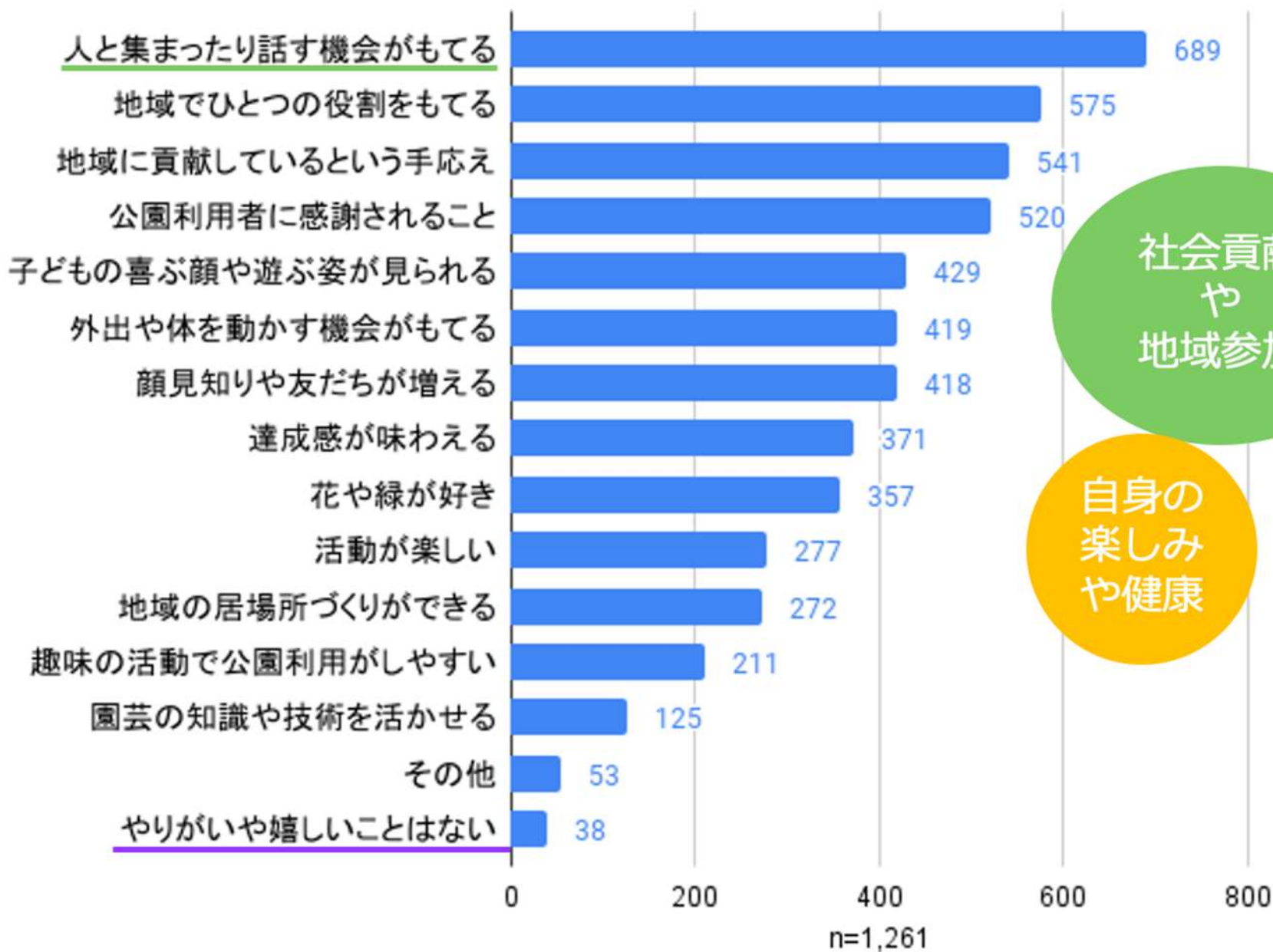


n=1,282

- ・活動の中心は、**60-70-80歳代**の人たちが担っている
- ・回答のあった団体のうち**89.1%**に**70歳代**がいることがわかった
- ・約半数の団体で、一番人数の多い世代は**70歳代**という回答



1 1) やりがい





12) こんな「困った」の声も

公園の活動が楽しければ参加者も増えるであろうが、楽しくないので義務としてやっている感じである。

高齢化＝草取り＝負担＝わずらわしい＝行かないと罪悪感がある＝行かない人はいつも行かない＝不公平感がある。"総合的に判断すると消極的ながら参加している"と思います。

高齢化が進み、現在公園清掃に参加できない人も増え、参加している人への負担が大きくなっている。できる限り頑張りたいが、あまり長くは続かないのではないかと不安になる

身体的な衰えもあり、思う様に活動が出来ない。今年はコロナ禍によりさらなる支障も重なり存亡の危機状態となっている。

70代が大半の為、冬場の落ち葉清掃が大変。活動が続けられるのが心配。

高齢化に伴う夏場の草刈りをどう運用して行くか悩みは多い。

公園ボランティアは自治会加入者で高齢者が多い。公園利用者は自治会未加入者世帯が多く、不満がよく聞かれる。

→「ありがとう」の可視化と循環、コミュニケーションの改良が必要か



各地の公園ボランティアの活動を紹介



いろいろな団体の活動取材し、記事として配信

公園ボランティアの楽しさや、活動のヒントとなる情報を紹介





事例：多世代で楽しみながら活動

師岡打越第三公園（横浜市）

30年続く公園愛護会を継承し
公園利用者でもある子育て世
代が中心となって、多世代で
楽しく活動している。

多年草や球根を活用した、ロ
ーメンテナンスな花壇作りも
実践。





事例：地域のNPOが子どもたちの遊び場を提供

新川崎ふれあい公園 (川崎市)

NPOが主体となり、地域の親子と一緒に、自然遊びや農体験ができる森を作っている。
ステイホームで参加者増。

園庭のない保育園と協働し、
子どもたちに自然遊び体験の場を提供する取り組みも。





事例：子育て世代が新しく公園愛護会を立ち上げ

高谷下公園（藤沢市）

子育て世代が公園利用者に声をかけて公園愛護会を新設。

フェンス修理や砂場の枠の掘り起こしも、楽しく実施。
公園を活用した地域の子どもたちとのお楽しみイベントも企画。





事例：シニアの健康と自由の楽しみ

スマイルパークこわだ (茅ヶ崎市)

シニア世代の健康維持と社会参加や交流の場として機能。役所と対話をしながら、花壇の新設や拡大、物置移設など積極的な園内改善を進める。

オリジナルTシャツを作ってやる気もアップ。





事例：企業が愛護会活動をサポート

公園清掃用ゴミ袋の寄付（茅ヶ崎市）

市内の造園業7社で作る「茅ヶ崎市緑化事業共同組合」が、公園愛護会用のゴミ袋1万枚を寄付。

公園ボランティアや地域の小さな公園を支援する方法の一つとして、企業ならではのアプローチ。



公園ボランティアの担い手としての企業の活躍も

- ・八王子市（東京都）では、企業向けチラシを作成配布し、新たな担い手としての企業を勧誘。
- ・大牟田市（福岡県）では、企業が参加しやすいよう複数制度の併用も。





今後やっていきたいこと

公園ボランティア実態調査の継続と拡大

まだまだ一部。自治体の仲間、ボランティア仲間を増やし、より多くのデータや声を集めていく。

担い手の詳細の声を聞くアンケート調査自体が自治体応援機能も有しているため、継続と拡大は活動支援になる。

担い手団体と行政のコミュニケーションが郵便と電話。デジタル化の可能性を探るための調査をする必要あり。

公園ボランティア活動が活性化する情報共有やサポート

楽しく活動するためのヒントや、具体的な実践方法を情報として発信共有することで、「やってみたい」を応援。

多様な人が参加したくなるボランティアの楽しみを発信し、公園利用者とボランティアの分断を解消していく。

多様なミクロの活動を、複数の切り口や価値軸で褒める新たな表彰制度の設置。投稿や互選でノウハウ情報の共有機能、横の繋がり機能も担う。



公園ボランティア活動の充実に必要だと思うこと

「やってほしい」から「やりたい」活動へ

ボランティア活動は、行政が求める作業をお願いする押し付け（push）型ではなく、人々が楽しく関わる気持ちを引き出す（pull）型であるべき。

やらされると嫌になるが「やってみたい」に寄り添い応援することは、活動のモチベーションになるほか、新たな担い手の裾野拡大にも繋がる。

多様な価値軸での新しい評価制度の充実

技術的に優れた点だけでなく、長年の継続や、地域との連携、先進的な利活用など、それぞれのミクロな活動を褒めていく評価制度があると良い。

地域別やジャンル別、公園利用者投票やボランティア担い手の互選、自治体からの感謝など多様な価値軸で、既存の賞を否定しない新しいもの。

行政・公園管理者の意識の变革

ボランティアによる日常の維持管理や住民の積極的な公園利用に対して優先順位が低い自治体が多く、予算や人員も後回しで不足しがち。

事務手続き等のデジタル化で業務負荷と時間を圧縮し、その分より効果的なコミュニケーションに注力するなど意識やシステムの変革の余地あり。